

## 無治療経過観察の肺MAC症において症状の増悪を契機に 診断された肺 *Mycobacterium massiliense* 症の 1 例

神宮 大輔    高橋    洋    矢島 剛洋    庄司    淳  
生方    智

**要旨：**〔症例〕72歳，女性。2008年に肺 *Mycobacterium avium* complex (MAC) 症と診断され無治療で経過観察されていた。2013年10月より湿性咳嗽が出現し，胸部異常陰影が増強したため当科に紹介された。複数回の喀痰ならびに気管支鏡検体から抗酸菌が分離された。DDH法ではいずれの検体でも *M. abscessus* complex が同定され，MACは同定されなかった。*M. abscessus* complex による増悪と判断し，抗菌化学療法を開始した。自覚症状は速やかに改善し，喀痰培養も陰転化した。分離菌の遺伝子解析で *M. abscessus* subsp. *massiliense* (以下 *M. massiliense*) と同定された。化学療法は菌陰性化2年間で終了したが，再排菌は認めていない。〔考察〕 *M. massiliense* は近年の遺伝子検査技術の発展により *M. abscessus* complex の亜種として認められた。亜種ごとに治療方針・予後が異なることから，肺 *M. abscessus* complex 症の診断時には亜種同定まで行うことが必要である。

**キーワード：** *Mycobacterium abscessus*, *Mycobacterium massiliense*, 肺非結核性抗酸菌症, *Mycobacterium avium* complex (MAC), 遺伝子解析